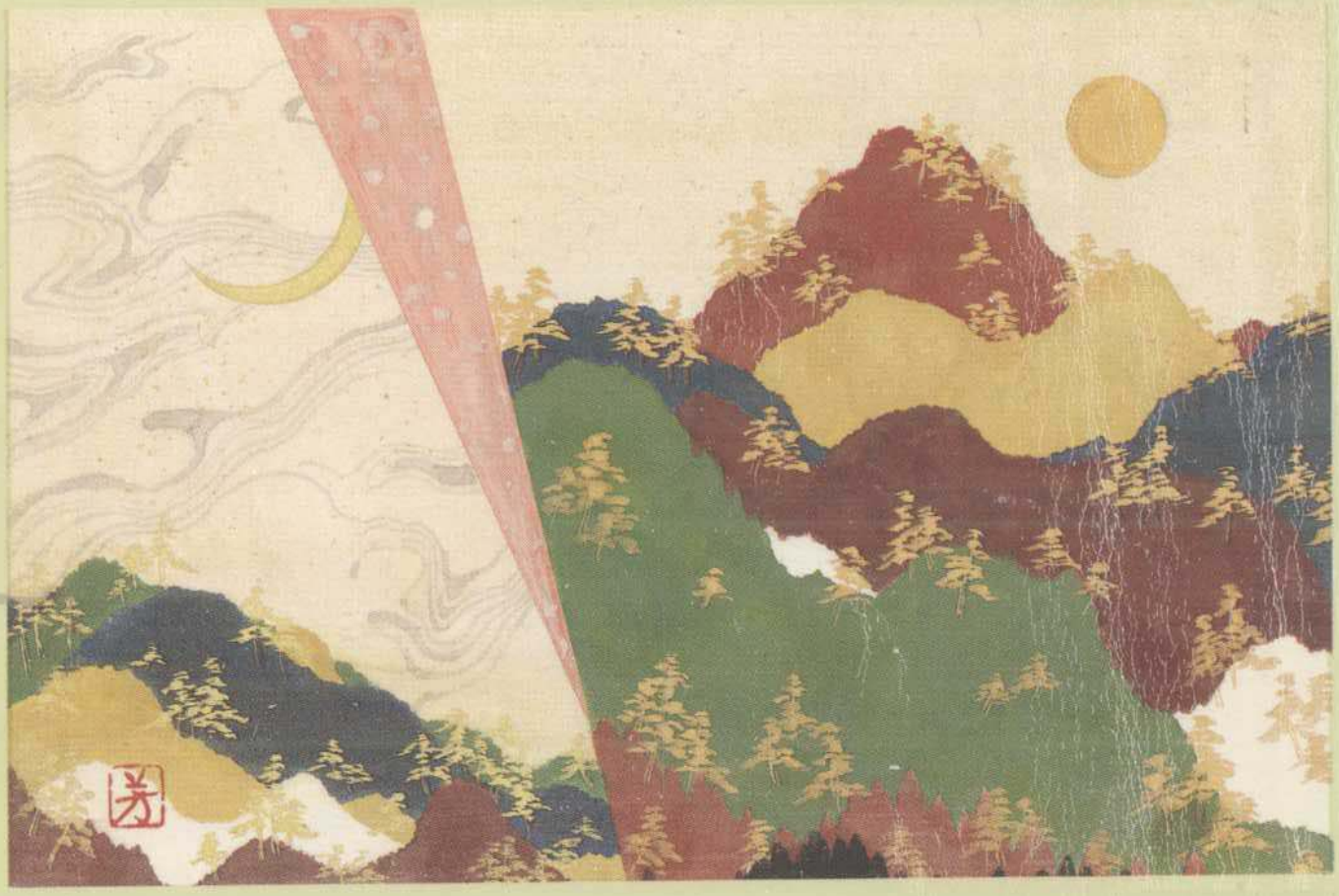
現代語訳対照

古今和歌集

小町谷照彦訳注



旺文社文庫

「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたって、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやしくも知識人たらんとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値あるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。も知識義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的若い日むきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

旺文社社長　赤尾好夫

〔編集顧問〕小田切進　茅誠司　竹内均
外山滋比古　林健太郎　森戸辰男（五十音順）

旺文社文庫　現代語訳対照　古今和歌集　定価はカバーに表示してあります

1982年6月25日　初版発行
1984年　重版発行

（乱丁・落丁本はお取りかえしますので本社に直接お申し出ください）

訳注者　小町谷照彦
発行人　赤尾好夫
編集人　中山行雄
印刷所　旺文社専属日新印刷株式会社／合資会社 中村印刷所
製本所　有限会社 穴口製本所

発行所　株式会社　旺文社
162　東京都新宿区横寺町
電話（編集）03-266-6372
（販売）03-266-6415

312092　ISBN 4-01-064075-8
© 小町谷照彦　1982
Printed in Japan　（許可なしに転載，複製することを禁じます）

現代語訳対照

古今和歌集

小町谷照彦訳注

旺文社文庫

定価480円

ISBN4-01-064075-8 C0195 ¥480E

旺文社文庫

現代語訳対照

古今和歌集

小町谷照彦訳注

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

秋分

1078、しのびしのびに

忍び
616 … 2段（七行ずつ）
654
735
745

忍びて
5段 … 632
七行（みなびける）

みそのに
645（七行ずつ）

（を）
（を）いいかりけり

（を）
e はじめ田法　恋之歌
38
38

雑歌の部
37

秋分
40

延喜五年度上以後、補入歌と思されるもの、

68
89
134
838
839
919
1067
1006

（江新撰和歌）

目次

凡例……三
仮名序……八
巻第一　春歌上……三一
巻第二　春歌下……四七
巻第三　夏歌……六二
巻第四　秋歌上……七〇
巻第五　秋歌下……八六
巻第六　冬歌……一〇一
巻第七　賀歌……一〇八
巻第八　離別歌……一一四
巻第九　羇旅歌……一二五
巻第十　物名……一三一
巻第十一　恋歌一……一四一
巻第十二　恋歌二……一五六
巻第十三　恋歌三……一六九
巻第十四　恋歌四……一八二

巻第十五　恋歌五……一九七
巻第十六　哀傷歌……二一四
巻第十七　雑歌上……二三五
巻第十八　雑歌下……二四一
巻第十九　雑躰……二五七
巻第二十　大歌所御歌・神遊びの歌・東歌……二七五
家々に証本と称する本に書き入れながら、墨を以ちて滅(け)ちたる歌……二八二
真名序……二八六

校訂付記……三〇一
補注……三〇三
解説……三三七
参考文献……三四二
索引
歌合出典一覧……三四六
作者略伝・作者名索引……三四七
地名索引……三六二
歌語索引……三七三
初句索引……三九四

小町谷照彦

古今和歌集

やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり。花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、たけき武士の心をも慰むるは歌なり。

この歌、天地開け始まりける時よりいでにけり。天の浮橋の下[illegible]り給へることをいへる歌なり。しかあれども、世に伝はる[illegible]天にしては下照姫に始まり、下照姫とは、天稚御子の妻なり。兄の神のかたち、岡谷に映りて輝くを詠める夷歌なるべし。これらは文字の数も定まらず、歌のやうにもあらぬことどもなり。あらかねの地にしては、素戔嗚尊よりぞ起りける。ちはやぶる神代には、歌の文字も定まらず、素

(1)漢詩を「からうた」と言うのに対して、和歌を「やまとうた」と言った。倭歌とも。
(2)心がもとになって歌となるのを、植物の種と葉にたとえた。
(3)事物と行為。
(4)託して。生活の中で生じた心情を、見聞した事物に託して表現する。
(5)かえるの歌語。春の鶯に対して秋の河鹿かじかと言うが、限定しなくてもよい。
(6)すべての生き物。和文特有の強調表現。
(7)天と地。
(8)霊魂と神祇じんぎ。
(9)天地開闢かいびゃく以来、和歌があったとする。「我が国にかかる歌をなむ神代より神も詠んたび」（土佐日記）。
(10)この部分は古注と呼ばれ、後から加えられたものと言う。
(11)伊弉諾尊 いざなぎのみこと

〔和歌の本質と効用〕　和歌は、人の心を本にして、多くの言葉となったものである。この世の中に生きている人は、かかわり合う事がらが多いものだから、それにつけてあれこれと思うことを、見るものや聞くものに託して、歌として表現するのである。花に鳴く鶯や水に住む蛙の声を聞いてみると、すべての命あるものは、いったいどれといって歌を詠まないものがあるだろうか。力をも入れないで天や地を動かし、目に見えない魂や神を感じ入らせ、男女の仲をもうち解けさせ、猛々しい武士の心をもなごやかにさせるのが歌なのである。

〔和歌の起源〕　この歌は天地開闢の時より詠み出されている。（天の浮橋の下の磤馭慮嶋で女神と男神が結ばれたことをうたった歌である。）しかしながら、人の世に伝わったのは、天上では下照姫の歌に始まり、（下照姫とは天稚彦の妻である。その歌は兄神の味耜高彦根神の美しき容姿が岡や谷に照り映え輝くのを詠んだ夷曲の歌をいうのであろう。これらの歌は音数も一定せず、歌のようにも見えないものである。）下界では素戔嗚尊より起ったのである。神代には歌の音数も一定せず、飾りけなくものごとをそのままにうたったので、歌に詠む事がらの内容をはっきりと理解していなかったらしい。人の世となって、素戔嗚尊からようやく三十一字の歌を詠むようになった。（素戔嗚尊は天照大神の兄である。その歌は奇稲田姫とお住みになろうとして、出雲国に御殿を新しくお造りになった時、その場所に八色の雲が立

と伊奘冉尊が結婚した時に、唱和した言葉。「あなうれしゑや、うまし少男をとこに逢ひぬること」「あなうれしゑや、うまし少女をとめに逢ひぬること」（日本書紀・神代上）。

(12)「天」の枕詞。「地」の枕詞「あらかねの」と対応し、高天原と下界とが対比されている。

(13)大国主尊の娘で、天稚彦（天稚御子は誤り）の妻。天照大神に背き、怒りに触れて死んだ夫の葬儀の際、兄の味耜高彦根神の美貌を替えて、「天なるや　弟織女　玉の御統　あな玉はや　み谷二渡らす　味耜高彦根」（日本書紀・神代下）と歌い、この歌を夷曲と言う。

(14)夷曲の誤読か。

(15)天照大神の弟（兄は誤り）。高天原より追放されて、出雲の国（島根県）簸川

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

直にして、事の心わきがたかりけらし。人の世となりて、素戔嗚尊よりぞ三十文字あまり一文字は詠みける。素戔嗚尊は天照大神の兄なり。女と住み給はむとて、出雲の国に宮造りし給ふ時に、その所に八色の雲の立つを見て詠み給へるなり。(2)八雲立つ出雲八重垣妻籠めに八重垣つくるその八重垣を。

かくてぞ、花をめで、鳥をうらやみ、霞をあはれび、露をかなしぶ、心言葉多く、さまざまになりにける。遠き所も、出で立つ足もとより始まりて、年月をわたり、高き山も、麓の塵泥よりなりて、天雲たなびくまで生ひ上れるがごとくに、この歌も、かくのごとくなるべし。(5)難波津の歌は、帝の御初めなり。(7)大鷦鷯の帝、難波津にて皇子と聞えける時、春宮をたがひに譲りて位に即き給はで三年になりにければ、(8)王仁といふ人のいぶかり思ひて、詠みて奉りける歌なり。この花は梅の花をいふなるべし。(9)安積山の言葉は、(10)采女の戯れより詠みて、(11)葛城王を陸奥へ遣はしたりけるに、国の司、事おろそかなりとて、まうけなどしたりけれど、すさまじかりければ、采女なりける女の、土器とりて詠めるなり。これにぞ王の心とけにける。安積山影さへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふものかは。この二歌は、歌の父母のやうにてぞ、

上ひのかわかみに至り、八岐大蛇やまたのおろちを退治して、奇稲田姫と結婚する。

(16)伊奘諾尊・伊奘冉尊の代までを神代、天照大神の代から後を人の世と解する説がある。「天」「神代」、「地」「人の世」が場所と時代を示して対応。「ちはやぶる」は「神代」の枕詞。

(1)「八雲」の「八」は数が多い意だが、それを八色と誤解したもの。

(2)結婚のために新築した家を祝う新室寿ぎの歌。妻を住まわせるために、幾重にも垣をめぐらした立派な家を建てるという意。

(3)歌を成り立たせる心と言葉。

(4)白楽天の座右銘「千里ハ足下ヨリ始マリ、高山ハ微塵ヨリ起ル、吾ガ道モ亦此ノ如シ、之レヲ行フコト日ニ新あらたナルヲ貴

ち昇るのを見てお詠みになったものである。雲がむらがり立つ出雲国の幾重にも垣をめぐらした御殿よ、妻を隠り住まわせるために御殿を造るのだ、そのすばらしい御殿よ。）

〔和歌の発展〕　このように短歌の形式が成立して、花の美しさを賞め、鳥の楽しげな声をうらやみ、春の霞に感じ入り、秋の露を悲しむ、そのような心を言い表わした歌は、数も多く内容もさまざまになった。遠くへの旅も第一歩より始まって年月を経て達し、高い山も麓のわずかな塵や泥から積み重ねられて雲のたなびく所まで伸び届くように、この短歌も長い年月の成長によって発展したのであろう。難波津の歌は仁徳帝の御代の初めを祝う歌である。（仁徳天皇が難波で皇子であられた時、弟皇子と春宮の位をたがいに譲り合って即位なさらず、三年も経ってしまったので、王仁という人が気がかりに思って、詠んで奉った歌である。この花は梅の花をさすのであろう。）安積山の歌は采女が葛城王の機嫌をとるために遊び興じながら詠んだ歌であって、（葛城王を東北地方に派遣した時に、国司の応接の態度が粗略だということで、宴席の用意などしてあったが、座がしらけ興がのらなかったので、都で采女として仕えていた女が、盃を取って酒を勧めながら詠んだ歌である。この歌によってやっと王の機嫌がなおった。安積山の影までが映って見える山の井のように、心浅くあなたのことを思ってはおりません。）この二首の歌は、歌の父と母のように尊重され、習字をする人が最初に習うものとしている。

ブ」による。
(5)難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花。後出。
(6)仁徳天皇の御代の初めを祝う歌とするのが通説だが、朝廷の公事に関する最初の歌とする説もある。
(7)仁徳天皇。応神天皇の没後、弟の兎道稚郎子の和きいらつこと皇位を譲りあって三年経ったが、弟の死により漸く即位した。
(8)百済の帰化人の学者。
(9)安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに（万葉集・巻十六・三八〇七）。後出の歌は下句を異にする。
(10)奈良時代の後宮の下級の女官。郡の少領以上の子女の美しいものが選ばれ、御膳・手水などに奉仕した。
(11)橘諸兄（六八四―七五七）かと言われる。
(12)最初の歌であり、男女

手習ふ人の、始めにもしける。(1)

そもそも、歌のさま、六つなり。(2)唐の詩にも、かくぞあるべき。

その六種の一つには、そへ歌。(3)大鷦鷯の帝をそへ奉れる歌。

難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花(4)

といへるなるべし。

二つには、かぞへ歌。(5)

咲く花に思ひつく身のあぢきなさ身にいたつきのいるも知らず(6)

て

といへるなるべし。

これは、直言にいひて、ものにたとへなどもせぬものなり。(7)この歌、いかにいへるにかあらむ。その心、えがたし。五つに、ただこと歌といへるなむ、これにはかなふべき。

三つには、なずらへ歌。(8)

君に今朝朝の霜のおきていなば恋しきごとに消えやわたらむ(9)

といへるなるべし。

これは、ものにもなずらへて、それがやうになむあるとやうにいふなり。この歌、よの歌であり、幼児の手習いの歌なので、尊重して父母によそえた。

……

(1)「難波津も何もふと覚えむ言ことを、と責めさせ給ふに」（枕草子・清涼殿の丑寅うしとらの隅の）、「難波津をだにはかばかしう続け侍らざんめれば」（源氏物語・若紫）などあり、幼児でもよく知っている必須の歌とされていた。好忠集などにこの両歌の文字を一つずつ歌の首尾においた沓冠くつかむり歌がある。

(2)歌の体。詠みぶり。心と詞、情と景とが関わりあって形づくられた歌のありよう。漢詩の六義による。

(3)暗喩の歌。景物になぞらえて詠み、裏に心情を託したもの。六義の風に当たる。

(4)冬落葉していたのが、春になって芽ぶき花が咲いたことに託して、即位の時

〔和歌の六つのさま〕　さて、歌の「さま」は六つある。漢詩においても同様であるようだ。その六種の第一には、「そへ歌」。仁徳天皇をよそえ申し上げた歌。

難波津に咲くよ、この花が。今は春になったと咲くよ、この花が

という歌が、これに相当しよう。

第二には、「かぞへ歌」。

咲く花に心を奪われている身の空しさ、身に病気の取り付くのも知らないで　（拾遺集・物名・大伴黒主）

という歌が、これに相当しよう。（これはものごとをありのままに詠んで、ものになぞらえなどもしないものである。この歌は、どのように詠んだものであろうか。その意味が理解しにくい。五番目に「ただこと歌」と言っているのが、この例歌には相当しそうだ。）

第三には、「なずらへ歌」。

あなたが今朝、朝の霜が置くように、起きて私を置いて行ってしまったならば、恋しく思う度に、消え入るばかりに悲しみ続けることだろうか

という歌が、これに相当しよう。（これは詠みたいものごとを何かになぞらえて、そのようであるというように詠むのである。この歌がよく適合しているとも見えない。母が飼っている蚕（かいこ）が繭（まゆ）にこもっているように、私の心はうっとうしいことだ、あの女（ひと）に逢えなくて。このような歌が、例歌には適当だ

が到来したことを暗示している。「春」の枕詞とする説もある。

(5)物名の歌。心情を詠んだ歌の中に、景物の名を散りばめ並べて数え上げていくもの。掛詞や縁語を用いたものが多い。六義の賦。

(6)鳥の名の「つぐみ」「あち」「たづ」が隠され、「いたつき」に病気と矢尻、「入る」と「射る」が掛けられている。

(7)古注は、六義の賦から、心情をそのままに、述べた正述心緒的な歌と解している。

(8)比喩の歌。心情を景物になぞらえて詠んだもの。序詞や掛詞を用いたものが多い。六義の比。

(9)「朝の霜の」が「置き」に掛けて「起き」の序詞。「消え」は、霜が消える、身も消え入るように歎く、の両意を重ねる。

「伊勢」にあり
「土佐」ナシ

くかなへりとも見えず。(1)たらちめの親のかふ蚕の繭こもりいぶせくもあるか妹に逢はずて。かやうなるや、これにはかなふべからむ。

四つには、(2)たとへ歌。

(3)わが恋はよむとも尽きじ荒磯海の浜の真砂はよみ尽くすとも

(4)これは、よろづの草木鳥獣につけて、心を見するなり。この歌は、隠れたる所なむなき。されど、はじめのそへ歌と、同じやうなれば、すこしさまを変へたるなるべし。(5)須磨の海人の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり。この歌などや、かなふべからむ。

五つには、(6)ただこと歌。

(7)いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし

といへるなるべし。

(8)これは、事のととのほり、正しきをいふなり。この歌の心さらにかなはず。(9)とめ歌とやいふべからむ。(10)山桜飽くまで色を見つるかな花散るべくも風吹かぬ世に。

(1)「たらちめの」は「親」の枕詞。三句までが「いぶせく」の序詞。万葉集・巻十二・二九九一の類歌。
(2)比喩の歌。心情と景物が対比的に詠まれているものを言う。六義の興。
(3)「よむ」は、数える。「荒磯海」は波の荒い磯。後には越中（富山県）の歌枕となる。数え尽せない恋が浜の真砂に対比されている。
(4)古注は「たとへ歌」を暗喩の歌と考えているようだが、「そへ歌」との区別が明らかでない。
(5)恋四・七〇八。
(6)心情や景物を比喩などは用いずに、平常の言葉でありのままに詠んだもの。「なぞ、ただことなる」（土佐日記）。六義の雅。
(7)恋四・七一二。
(8)古注は、政教上のことが正しく行なわれていることを詠んだものとしてい

ろうか。）

第四には、「たとへ歌」。

私の恋の思いは、いくら数えても尽きることはあるまい。たとえ波の荒い磯の砂は数え尽すことができようとも

という歌が、これに相当しよう。（これはさまざまな草木や鳥獣に託して、心情を表現するものである。この例歌には隠れている所がない。だが、初めの「そへ歌」と同じようなので、すこし「さま」を変えて、例歌を挙げているのであろう。須磨の漁師の塩を焼く煙が、風が強いので、思いもかけない方向にたなびいてしまった。この歌などが適合するだろうか。）

第五には、「ただこと歌」。

もし偽りがない世であったならば、どれほどか人の言葉が嬉しく思われるだろうに

という歌が、これに相当しよう。（これは世の中のことが安定して正しく行われていることを詠んだ歌をいうのである。この例歌の内容はすこしも適合していない。「とめ歌」とでも言ったらよいだろうか。山桜の美しさを十分に味わい尽したことだ、花が散るように風も吹かないのどかな世なので。）

第六には、「いはひ歌」。

この御殿はなるほど豊かに富んでいる。三棟にも四棟にも分かれて、殿造りをしている

る。概して、古注は六義を直訳的に解している。

(9)未詳。求め歌（理想的なものを求める歌）などと言われる。

(10)兼盛集に見える平兼盛の歌。歌仙本兼盛集は、二句「飽くまで今日は」。この歌は、王充の論衡「太平ノ世ニハ、五日ニ一タビ風フキ、十日ニ一タビ雨フル、風ハ条ェダヲ鳴ラサズ、雨ハ塊ッちくれヲ破ラズ」に依ると言う。例歌から見て、古注は村上朝以後に記したものということになる。

続古今集 春下 (一〇四) 平兼盛

天元二年八月 従五位下守任 平兼行母

至ル天元二年 正暦元年 (九九〇) 改元

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com